

書評

齋藤文俊 著

『漢文訓読と近代日本語の形成』

堀川 貴 司

はじめに

本書はその書名どおり、近世における漢文訓読の実態を具体的に探り、その変遷の延長線上に近代の文語文および言文一致をめざした口語文の形成を捉えようとした書である。

その構想の確かさは、序章から終章へと至る全一章が整然と並んだ目次を一覧して頂ければ誰もが感得できる。著者のそのような意図に即して内容の当否を論じるオーソドックスな書評は、いずれ専門の国語学者によって実現するであろうから、評者としてはやや異なった視点、すなわち評者の専門である日本漢文学研究の興味関心に引きつけた形で論じてみたい。

本書の概要

とはいえ、その全体像に全く触れずに終わるのも、著者にも読者にも失礼であろう。概要のみ述べておこう。

「序章 近世・近代の言語文化と漢文訓読」において、まず近世の漢文訓読に関する代表的な言説や研究を挙げ、近世を通じた訓読法の変化の特徴として、

① 補読語（読み添え語）の減少

② 音読の増加

の二点を抽出する。この変化は直読を理想とする徂徠学派によって推進されたが、後期には復古的な訓読を行う学者も出た。

この見通しに基づき、訓点を〈前期〉〈後期〉〈復古〉の三グループに分類する。そして、第一章以降、具体的な資料調査に基づいて分析を行うが、その資料は『論語』の版本である。前期七種、後期七種、復古四種を対象とする。ここで注目すべきは「道春点」（林羅山の訓点）が全部で五種あり、三グループに分かれて分類されていることである。同じ道春点と称していても、刊行時期によってそれぞれの特徴を持った訓読を行っているこ

とは、漢文学の立場でこれらを扱う際にも注意すべき点であろう。そのほか、仮名付（総ルビ）のもの二種、近代の訓点本一種、漢学者による漢語文典二種、近代の文法書三種が参考として挙がっている。これらも第一章以降、適宜参照される。

近代の文章への影響としては、明治前期に流行した政治小説における漢文訓読体の影響、（幕末も含むが）蘭学・英学の学習や翻訳における漢文訓読の応用、の二点が重要な論点として言及されている。

漢文訓読

このような前提のもと、九章にわたり論述されていくが、ここではまず近世の漢文訓読について論じた部分をまとめて取り上げよう。

特徴の二点のうち、①はさまざま要素が含まれているため、それぞれ詳しく論じられている。

第一章：「則」の補読語「トキ」（あるいは「則」がない

場合の条件節についても）

第三章：時の助動詞の使用（「キ」「ケリ」「ツ」「ヌ」「タリ」「リ」「ン」）

第五章前半：可能表現（「…コト能ハズ」「コトヲ得」）

および補読語「コト」全般

第六章前半：当為表現「不可不」の訓読および補読語「アリ」全般

第七章前半：敬語表現「タマフ」の補読

いずれの場合も、大まかな流れとしては、〈前期〉から〈後期〉へ行くにつれて減少し、〈復古〉において復活するという傾向を指摘できる。

この五つの要素のうち、第一章（「則」）・第五章・第六章に関しては、言ってみれば読み方の相違であって、内容の理解には関わらない。しかし、第一章の「則」がない条件節の場合と第三章・第七章は、漢文の本文解釈に関わり、訓読文の日本語らしさを支える重要な要素となるものである。

特に第七章、敬語表現に関して、著者は鈴木胤の発言を引用する。

儒書ノ訓ヨミハ、タトヘバ論語ナレバ、論語ノ作者ガ和人ニナリテ、和語ヲツカヒタル体也。サレバイヅレモ其作者ノ心ニテヨムベキ事也。（前後略）

〈復古〉グループに属する鈴木胤は、加点者あるいは読者が孔子を敬うから敬語を使うのではなく、『論語』編者がもし日本語で書いたとしたら当然敬語を使うべき所（孔子や魯の国の為政者の動作）に使うのだ、それは仏書の翻訳（ブツダの弟子になりにかわって翻訳している

から、ブツダに敬語を用いる)のと同じだ、と主張する。深い意味での訓読⇨翻訳説を述べたものとして重要であろう。

一方、第三章、時の助動詞については、同時代の文語文における使用状況や、国学者の文法書における指摘をふまえ、漢文訓読に限らず、全体に使用頻度が落ち、また使用場面が限定されていくことを明らかにしている。漢文訓読の変化を近世文語文全体の変化のなかで捉えようという、新しい視点をもたらしたものであろう。

このように、内容理解にとつて重要な敬語と助動詞の補説が減少したことは、言ってみれば、漢文訓読から翻訳という性格を奪うことになった。それを極端に推し進めたのが、第二章において詳述される一齋点である。これを著者は徳田武氏の言を借りて「訓読の形式性」の追求と位置付けている。すなわち、もとの漢文を常にイメージし、それを復元することを目的とする、言ってみれば漢文暗誦の手段(これは古田島洋介氏が常々説くところである)という、漢文訓読のもう一つの性格を前面に出したものと言える。

これらのことは、これまでも大まかな傾向としては指摘されていたが、資料に基づき、定量的な分析を行い、その変化を実証したことは著者の功績の第一であらう。

②に関しては、第一章第二節において、動詞を訓で読むか「ス」とサ変動詞で読むか、という観点から、一字の語と二字以上の語に分けて調査分析している。これも序章にあるとおり、〈前期〉から〈後期〉へ行くにつれて増加、〈復古〉で減少という流れである。ここで重要なのは、二字漢語の音読がそのまま近代以降の新しい漢語として流用されている、という指摘で、語彙の面においても近世の漢文訓読と近代日本語との連続性が見えてくる(著者は慎重に、今後の詳しい調査が必要だとしている)。

近代日本語とのつながり

もう一つのテーマである近代日本語への漢文訓読の影響については、次の章において論じられる。

第四章：時の助動詞の使用

第五章後半：可能表現

第六章後半：当為表現

第七章後半：敬語表現

第八章：聖書における二人称代名詞

第九章：言文一致との関係

第四章は第三章の分析を受け、第五章～第七章はそれぞれ前半の分析を受けての論である。

第四章では明治前期、過去・完了の助動詞の使い分けあるいは使用の有無が雅俗あるいは和漢洋の文体を区別する目印になるといふ、当時の言説や先行研究に基づき、政治小説『花柳新話』『佳人之奇遇』とそれぞれの通俗本、漢訳聖書訓点本と和訳聖書（翻訳委員社中訳）、『八十日間世界一周』の二種の翻訳本を取り上げ分析する。その結果、全体に漢文訓読体においては助動詞の使用が少なく、特に「ケリ」「ツ」「ヌ」は全くといってよほど使われないことがわかる。これは近世の漢文訓読の変化の傾向に合致し、また明治以降の漢文訓読では定例化したものである。

第五章後半では、可能表現の「スルコト能ハズ」と「コト」を補読しない「スル能ハズ」の両者、「スルコトヲ得」と「スルヲ得」の両者（それぞれ後者は一斎点の特徴）が明治の文献に見られることをまず指摘する。さらに欧文直訳文体においては「シ能ハズ」といった、動詞の連用形に直接付く形が出現することが明らかにされる。これは可能の助動詞（canあるいは蘭語の kunnen）を直訳する際、白話文献によく見られる「得（あるいは不得）」が動詞に下接する形式の訓読「シ得タリ」「シ得ズ」からの類推であろうと著者は推測する。そのため、本章では第二節で白話文献の訓読についても分析されて

いる。もともと古代の和文では連用形に「ウ」が接続するのが普通であったが、これが白話文献の訓読において復活し、さらに明治につながっていくという筋道は、ことの歴史の不思議さを感じさせるものである。

第七章後半では、第四章同様、敬語の使用がほとんど見られないのが近代の漢文訓読体の特徴であると結論づける。

第八章は、第七章で和訳聖書において指摘された、イエスの動作に「たまふ」が比較的多く使われているということも関連して、ヘボン・ブラウン訳とベッテルハイム訳聖書ではイエスや神への呼びかけには「あなた」、その逆では「なんぢ」、と使い分けられていることを指摘する。先に引いた鈴木胤の言が想起され、興味深い。

第九章は石川啄木の日記を題材に、文語調（ナリ体）では「能ハズ」が、口語調（デアル・タ体）では「出来ナイ」が使われる、といった使い分けを指摘している。

終章での総括

著者はいくつかの先行研究を引きながら、「型」としての漢文訓読、という概念を提唱する——徂徠学派による訓読＝翻訳の不可能性の指摘によって、訓読は日本語としての不自然さに目をつぶり、もとの漢文を復元す

るための手段として、機械的・定型的になっていく、その頂点が一齋点であった。(復古)派からは攻撃されながらも、その訓読のリズムが知識人に共有され、明治以降の漢文訓読体の文章を生む母胎となる——おおよそこのようなところであろうか。この結論には評者も賛意を表したい。ひとつ付け加えれば、時の助動詞や敬語といった日本語として重要な要素を排除した文体は、もとの漢文が持っている抽象性(特定の場や時、対人関係などに依存しない)を日本語にもたらし、それが明治以降の欧文直訳体とも相まって、言論(大新聞や総合雑誌)の文体を作り出したのではないか。もちろん、そういう文体は和文にもないわけではない(たとえば、国学者のあまり擬古的でない文体)が、知識人の多くが漢学の土台に洋学を載せていた当時、和文は主流にはなれなかったであろう。

いくつかの注目点

ここからは、評者の興味関心に沿っていくつかの問題を取り上げたい。

第二章として、独立した章を設けて論じた一齋点は、確かに重要な訓読法であるが、ここでは特徴の分析、同時代あるいは後世の反響や影響については論じられてい

ても、その成立についてはあまり触れられていない。後半、対照的な訓読法として、口語訳を目指した三平点(宇野明霞)を取り上げ対比し、意外なことに共通する訓法があることを指摘している(それらはむしろ一齋点の特異性であり、明治以降の訓読では排除されている)。そういうことでは、実は第一章(四〇頁、六八頁注(一))において、著者は嘉点(山崎闇齋)との近さについて近藤啓吾氏の指摘を引用している。また、音読の増加や「コト」「アリ」補読の減少(不使用)については、山子点(片山兼山)や冢田点(冢田大峰)が先行し、むしろ極端な傾向を示す場合もあることが著者作成の表から読みとれる。

このような他の訓読法との比較を積み上げることで、一齋点の形成過程をある程度推測できるのではなからうか。また、一齋自身がどういう意識を持っていたかについても、さらに資料を博搜する必要がある。

六五頁、「九合」という熟語を訓読するか音読するか、という点に関して、六八頁注(4)では、同様の表現が見られる『史記』の訓点本の読み方を考慮する必要があると述べている。確かにその通りで、本書は基本的に『論語』を材料にして通時的な変化を概観しようという観点から論じられているが、個別の語を精密に検討し

ようとすれば、まず用例を集め、それぞれのテキストについての訓読法の変遷を見て行かなくてはならない。これは膨大な作業が必要となる。しかし、上代・平安・鎌倉の旧仏教系の資料については、それが可能なだけの研究の蓄積があり、築島裕編『訓点語彙集成』（全八巻別巻一、汲古書院、二〇〇七―九）という集大成もなされた。今後はそのような努力を室町・江戸の文献にも及ぼす必要がある。

ただ、こういうこともある。以前評者は「桃李不言、下自成蹊」ということわざについて、その訓読を中世・近世のいくつかの文献について一覧したことがあった（堀川貴司「桃李モノイハザレドモ……」『国語通信』三五六、二〇〇〇・二）。ここでは「不言」を「モノイハザレドモ」と逆接の接続助詞「ドモ」を補読するものと「モノイハズ」と連用中止のまま接続するものと、二種類の訓読法が見られた。前者は『史記』、後者は鎌倉初期成立の金言集『管蠡抄』の訓読に由来するのではないかと、というのがその時の結論であったが、『管蠡抄』所引のこの語の出典が『漢書』であると記しながら、そのことをあまり考えなかったのが失敗だった。もう一步踏み込んで、後者の訓読は『漢書』に由来するとすればよかったのである。『史記』は注のなかでこのことわざ

をパラフレーズし、そこに「雖」を用いている。それに對して『漢書』の注は逆接の助字は用いず「而」で繋ぐのみであり（もちろん、内容からして「而」に逆接の意味を読み取れることは出来るので、現に慶安版の和刻本『漢書』は、注では「ドモ」を補読しているが）、その違いが本文の訓読に表れたのではないかと考えるべきだったと思っている。

長く訓読されてきた中心的な古典作品には、それぞれ固有の訓読がある。そのような資料の位相というのか、個別の事情を無視してひとしなみに論じることまた危険であろう。

さて、博士家の伝統的な訓読法が近世にもほぼそのまま継承されて付訓版本となった例として『文選』がある。慶安版『六臣註文選』の訓点が博士家に伝承されたものに依ることは芳村弘道氏の指摘がある（『唐代の詩人と文献研究』朋友書店、二〇〇八、第三部第六章）。芳村氏は天明四年（一七八四）刊、片山兼山点『文選正文』ではいわゆる文選読みが後退し、その後の『文選』版本の付訓に影響を与えていることを述べている。これなどは、「文之点」「道春点」といった〈初期〉訓読法を経由せず、博士家の訓読法がいきなり〈後期〉点に接続した例として、さらに精密な検討を加えるべき事例では

なからうか。

氏はさらに、慶安版以前の古活字版への書き入れ付訓について古く古い訓点を伝える例があることに言及している。この視点も『論語』に応用できる。というのも、慶長年間出版された古活字版およびその覆刻版の無訓本『論語集解』には、大量の書き入れ付訓本が存在するからである。文之点以前の『論語』訓点資料が本書ではあまり取り上げられていないが、これらを利用すべきであろう。諸本整理については高橋智氏の詳細な研究がある〔慶長刊論語集解の研究〕『斯道文庫論集』三〇・三二、一九九六・一―一九九七・一〕。

著者の興味は書名に示されたとおり、近世と近代の接続にある。そして本書はその点について十分な成果を挙げている。しかし、今述べたような例も含めて、評者としてはもう一つ、中世と近世の接続についても著者のねばり強く冷静な調査分析力を發揮してもらえるとありがたいと思っている。

先述の通り、旧仏教寺院の文献を中心に、鎌倉までの訓点資料は相当に研究が進み、国語学に貢献した。しかし、鎌倉・室町の新興勢力、特に漢学を重んじた禅宗関係の訓点資料はほとんど手つかずである。禅林における漢文訓読といえは『桂庵和尚家法倭点』を引用しておし

まい、というのではあまりにも淋しい。もちろんこれは評者自身の課題でもあるので、今後五山版やさまざまな写本類、あるいは抄物における本文の訓読など、「訓読」という観点から禅林の資料を見直していく必要があるう。

おわりに

著者は評者とは大学の同級生で、一年生のとき、東京大学史料編纂所の今泉淑夫先生の少人数ゼミで一緒にやり、文学部進学後は国語学と国文学とに分かれたが、助手として同僚だった時期もある。「こういうこと（近世の漢文訓読）やっているのは日本で二人だけだよ」とやや自嘲的に自分の研究を評するのを聞いた記憶があるが、あれは学生時代だったろうか。ここにようやくその研究が集大成されたことを喜ぶたい。

著者は最初まさしく『論語』版本をひとつひとつしらみつぶしに調査していく地道な研究の成果を論文とし、その積み重ねの上に近代の文体との関連を見ていくという視点を確保し、その成果を加えていった。本書はそういう軌跡をそのまま見せるのではなく、読者の理解を慮って、現在の到達点に立って再構成したものである。自己の研究を客観的に見つめ直すこのような作業は、評

者の経験に照らしても容易ならざることではあるが、これから自分の研究を世に問おうとする若い人たちには、内容のみならず、そういった著者の姿勢にも学んでもらいたいと思う。

（二〇一一年二月刊、勉誠出版、A5判、三三〇頁、
七、五〇〇円＋税）

（ほりかわ・たかし／慶應義塾大学附属研究所斯道文庫）